



## 対話的な学びのその先へ（7/1 学力向上に係る学習会）

兵庫教育大学大学院教授 勝見健史先生による講義「対話的な学びの質を問う～豊岡市の場合～」では、次のような視点で「対話的な学び」についてのお話がありました。

- ① 「関連付けて身につける」という学習方略が求められている。つまり「関係付ける学び」を徹底して行うこと。そのために授業の中で思考する場（対話的に学ぶ場）が必要である。
- ② 対話的な学びの質を上げる4つのポイント
  - ①学習形態の話にとどまっていないか（子どもが探究したい学習課題か）
  - ②活動づくりに終始していないか（「関係づける思考」をどの教科でも、いつでも、学習課題や発問、ワークシートなどに落とし込んでいるか）
  - ③ずれに着目した授業づくりになっているか（ずれを使って子どもをつないでいるか）
  - ④教師の働きに着目しているか（教師の出場・関与・介入で思考のステージを上げているか）
- ③ 豊岡市は「演劇<sup>で</sup>」コミュニケーション能力を鍛えている。演劇<sup>を</sup>学ぶのではない。4つの視点は、他者との異質性をベースに、他者への理解や、協働して学ぶことを示している。この4つの視点は教科共通の能力だ。学校ならではの「学び合いを核にした授業づくり」が大事だ。

講義の後、校種も学校規模も異なるメンバーでグループ協議を行い、以下のようなことが話題となりました。

- ①小中一貫で「めざす子ども像」が同じであるので、9年間の縦のつながりを意識し、小・中で同じ視点で研修できるのでは。
- ②教科の枠に関わりなく研究できるので、小中で授業を見る時の視点として取り組んでいくとよいと思う。
- ③対話が目的になってしまっている。対話を手段として「何を学ぶのか」を大事にしたい。



↑ 《活発なグループ協議》

対話的な学びの先にある、「深い学び」を子ども自身が実感できるよう、豊岡市ならではのコミュニケーション教育の4つの視点も関連づけ、授業づくりを進めていきましょう。

### 【8/5 豊岡市教育フォーラム「非認知能力の向上を目指して～豊岡市の取組～」】

第4次とよおか教育プラン推進のキーワード「非認知能力」の向上は、保育・教育のあらゆる場面で最も大事にしたい視点として位置づけられています。

当日は青山学院大学教授 刈宿俊文氏、演出家 わたなべなおこ氏をお招きし、意見交換や講義で理解を深めます。研究者や専門家の考え方や見え方に触れるよい機会です。この研修会での学びから、各校園での多様な実践が展開されることを期待しています。